南スーダンはいま

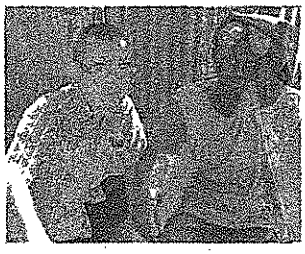
陸上自衛隊が派兵されている南スーダンで異なる民族間の武力衝突が発生し、政府軍が介入して死者18人、多数の負傷者が出ました（17、18日）。スーダンで南スーダンからの難民支援活動などに取り組む、日本国際ボランティアセンター（JVC）の今井高樹さん（スーダン現地代表）に、南スーダンの現状や派兵自衛隊の任務拡大の危険について、国際電話で聞きました。（中祖寅一）

JVCスーダン現地代表 今井 高樹（たかき）さんに聞く

襲撃された国連キャンプから避難する人々＝18日、南スーダン北東部・マラカル（国連提供）

衝突事件が起きたマラカルでは、17、18日以降も、状況はまったく安定していません。武力衝突には至っていないようですが、事件が起きたマラカルの国連保護施設（POC）では、まだ、何か起きているようです。何が起きているかははっきり確認できませんが、保護施設にはまだ武装した避難民がいて、国連のPKO（平和維持活動）部隊が威嚇、警戒の空砲を撃っているという情報が出ており、緊張が続いています。

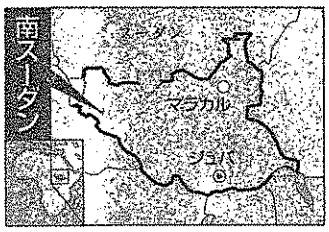
自衛隊「戦闘当事者」の危険



今井さん（左、本人提供、南スーダンで）

今回の事件では、保護施設内の複数の民族集団の間で武力衝突が起き、そこに政府軍が戦闘参加して、状況が深刻化したとされています。

複数の民族集団とは、ディンカとヌエルとシルクという三つの民族集団ですが、情報では、最初にディンカとシルクとの間で戦闘が起き、その後ヌエルも巻き込まれたようです。



現在の南スーダンの内戦（2013年12月～）は、大統領のサルバ・キールと副大統領のチャック・マチャルとの政争が、それぞれが属するディンカとヌエルという民族集団の対立を巻き込みながら発展してきたものです。

今回のシルクというのは国内第三の勢力で、事件の起きたマラカルを含む上ナイル地方では特に有力な勢力です。このシルク族は、ディンカ族に肩入れしたり、寝返ったりという動きを繰り返してきていました。

マラカルの事件を受けて、首都のジュバの国連保護施設の中で、ヌエル族が殺されたことへの抗議のデモが起きており、こういう動きは、他の地域に飛び火する可能性があります。

国連保護施設があるような地方都市では、政府軍の主力を占めるディンカ族からの襲撃を恐れるヌエル族が大量に保護施設に逃げ込んでくるケースが多く見られます。逃げ込んでいるヌエルの中にも武装した者もいます。

そのように武装したヌエルとディンカの武装グループとが衝突することで、保護施設内にまで戦闘が及ぶことがあります。

さらにディンカ中心の政府軍がこれに加われば、共産党の志位委員長が国会で質問したように、政府軍が国連保護施設、PKOを攻撃するという構図になります。

政府軍が組織的にやっているのか、それとも勝手にやっているのかは分かりませんが、その境界は曖昧で、司令官が黙認している場合もあれば、たき付けている場合もあるかもしれません。

だからそんなところに日本の自衛隊が行けば、内戦と武力衝突における戦闘の当事者になるのは避けられないと思います。

（2面につづく）

シリーズ 待ったなし！ 戦争法廃止

2/28 五旗

2/28 赤旗

南スーダンは今

今井高樹さんに聞く

国連施設内外で緊張続く

1面のつづき

敵か味方かの識別も難しい

しかも、武装した住民を含む多様で複雑な状況のもと、敵と味方の識別も難しい紛争の現場において、自衛隊が戦闘に巻き込まれずに「駆けつけ警護」「住民保護」をすることが現実に想定できるかは疑問です。

保護施設は、国内数カ所につくられていますが、もともとは国連PKOそのものの拠点です。内戦が起こって、多くの避難民が逃げ込んでくるために、国連の拠点そのものの敷地とは別に、場所を確保してフェンスで囲い、ビニールシートにテントをつくったような形で設けられているものです。現在、国内避難民は170万人、そのうち20万人が国連保護施設にいるとされています。

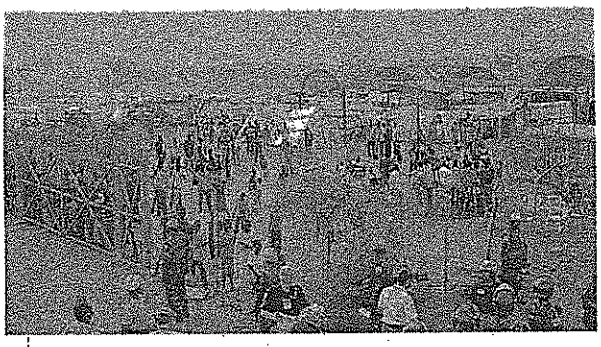
日本政府は、「ジュバの治安は安定している」などと言っているようです。政府軍がジュバ近郊を制圧し、大規模な武力衝突の危険が少ないのは事実ですが、避難民を収容する郊外の国連保護施設（POC）内や周辺では民族間の緊張状態があります。

市街地では夜間に武装した強盗団が徘徊（はいかい）し、私が昨年12月にジュバに滞在した時も「昨日も銃声が何度も聞こえた」という話を耳にしました。一般の日本人の感覚からすれば「とんでもなく治安が悪い」という状態ではないでしょうか。

昨年8月の和平合意後、12月ごろから統一政府をつくる協議が本格化し、反政府派のリーダー、リエック・マチャルへの第1副大統領ポストの割り振りもあり、紆余（うよ）曲折はありながら、一定の進展がないわけではありません。その中で、政府軍と反政府軍との戦闘、主力軍同士の戦闘は減ってはいます。

しかし、今回のような武装グループの衝突はまだ続いています。

戦闘とPKOの関連では、もともと、政府軍と反政府軍との大規模な戦闘には、PKOはほとんどノータッチでした。介入することもないし、介入できない。その現場に行くこともなかったのです。



国連南スーダン派遣団（UNMISS）が首都・ジュバに設置した国内避難民を収容するキャンプ（国連ウェブサイトから）

現在のPKO部隊の主要な任務は文民、民間人の保護です。特に避難民が逃げ込んでくる国連保護施設の保護だったわけです。その任務との関連では、今回のような武装グループの衝突は、減ってきたとは言い切れないし、今後も起きるだろうということです。状況としてよくなっていない。

暫定政府、統一政府をつくって安定をめざすという方向性がうまくいくかどうか。

そこは否定的な見方が多い。国連関係やNGO関係者も多くが、またどこかで合意が破たんし、戦闘状態に戻るのではないかと不安を持っています。私はスーダン（首都ハルツーム）から状況を見ており、もちろん十分は分かりませんが、私も見通せないと思う。

ただ一方で、副大統領の任命や閣僚の配分など、進んできていることも確かなので、必ず破たんするとは言えない。

非軍事の支援 日本は考えよ

その中で、日本政府としては、自衛隊派遣の準備より、今のこの壊れそうな和平に対し、非軍事面で何ができるかを考えるべきではないでしょうか。

政府側と反政府側に日本政府が和平を働きかけることや、マラカルのような不安定な地方部の統治機構の改善に向け、日本がどういった支援ができるか、ということを議論すべきだと思います。

現瞬間も内戦状態

志位委員長が危険性を暴露

日本共産党の志位和夫委員長は、南スーダンが2013年12月以来、激しい内戦状態にあると指摘。2015年8月の国連報告書が、南スーダン政府軍とその同盟軍による「焦土作戦」の実態を告発しているとし、無差別殺りくなどの深刻な証言を紹介しました。また今年1月21日の国連南スーダンPKOの報告書が「（この2年間で）情け容赦ない戦闘とその多方面にわたる影響が続いており、民間人全体の人権と生活条件に対する重大な衝撃を与えている」としていることをあげ、「まさに現瞬間も内戦状態が続いているということだ」と述べました。「（自衛隊が駐留する）ジュバは平穏」「武力紛争が発生しているとは考えていない」と繰り返す中谷元・防衛相、岸田文雄外相に対し「あまりにも無責任だ」と批判しました。

さらに志位氏は、昨年8月の国連事務総長報告で、昨年4月から8月までの国連PKOに対する攻撃102件のうち92件が、南スーダン政府軍によるものとされているとし、住民保護のために自衛隊が武器使用すれば、違憲の武力行使になることは明白だと批判しました。ここでも中谷防衛相は「（攻撃は）偶発的、散発的」などと根拠のない無責任な答弁を繰り返しました。